

11月10日(土)午後7～9時、浜北区小林・高齢者ふれあい福祉センターにおいて87名。また、11日(日)午前10～12時、天竜区山東・やまゆり荘において35名の市民が参加し、災害ボランティアセミナー「被災地・被災者から学ぶ」を、講師に能登半島地震被災地から滝井元之さん(石川県穴水町)被災地外から支援を行った特定非営利活動法人レスキュー・ストック・ヤード(名古屋市)の栗田暢之代表理事を迎え開催した。

== 「被災すると何か、何が起きたのか“今”振り返る」 ==

講師：滝井元之さん (穴水町ボランティア連絡協議会所属)

自己紹介

4年前に中学校の教員を退職。昨年11月から「子どもと親と教師のための教育相談室『あした塾』」を開設し、電話や出前相談に対応している。その傍ら地元の穴水中学校の「心の相談員」をしている。

穴水町の紹介

トキまんじゅう

復興再生に取り組む中から、昔は穴水町で「トキ」がたくさん飛んでいたことを思い出そうという意味、また町の宣伝を兼ね“おみやげ”を準備した。

時間の流れがゆっくり

海に“ボラやぐら”を組み魚が入ってくるのを待つ漁法が昔は盛んであった。

非常にのんびりした地域性を持っている。

地震発生

発生確率が1%未満

地震への認識はない。震度2くらいまでの経験があった程度。

能登半島に大きな地震はない

穴水町の人、これだけ揺れたら東京や横浜でも被害があると考え電話したが、逆に状況を教えられた。

震度6強では動けない

3月25日は退職時勤務校の閉校式に参加し学校施設内で被災した。

地震があったとき、机につかまるのが精一杯で動けない、頭の中で何を考えていたのか思い出せない、本当に怖い。またグランドゴルフをやっている人はグランドにへたりこんだ。どんなに頭で勉強しても、知恵があっても動けない。このことは経験したものでしか分からない。

動ける人の存在・・・後から聞いた話

ある若い先生は、大丈夫かと声をかけながら学校中を走った。ある中学生は、机の下に入る避難行動を訓練どおり行った。



被災するということ

小学校4年生の女の子の言葉

地震の時に父さんが覆いかぶさって、私を守ってくれてうれしかった。しかし、よく行っていたお菓子屋さんの家が倒壊し無くなり寂しい。

ただ呆然とする

自分の“暮らし”の場である大切な家などが一瞬にしてなくなってしまい大きなショック。また、どうしたら良いのか分からない。

地域の人では被災地を見られない

実は穴水の壊れた状態あまり見てない。私の家も被災したが一部だけ、気の毒で他の家は見られない。また、実際に目にしてしまうと途方にくれる。

しかし、新潟中越沖地震被災地に行ったときは、客観的に見られた。

被災地の今

今も穴水湾付近には、被災ゴミの山がつづいている状態で片付いていない。そのため、今年の花火大会が中止になった。

災害ボランティアセンター

地域防災計画において位置付け(明文化)輪島市、穴水町では社会福祉協議会がセンターを立ち上げた。しかし、穴水より被害ひどかった七尾市・志賀町では、行政の判断によりセンター立ち上げが遅れ、世間の議論を引き起こした。

初めての体験 = 分からない

災害ボランティア活動として何をすればよいか分からない。県内外の社会福祉協議会、被災地外のレスキュー・ストック・ヤードに支援をお願いした。

活動期間、状況

- ・何が出来るか分からないという認識から 4 日間だけの限定で立ち上げた。最終的には、5 月末まで活動を継続・延長した。
- ・最初、屋内にセンターがあったが、運営に広いスペースが必要になったため、途



中から外のプレハブやテントになった。

私の行動を振り返る

- ・気の毒だから行かないではなく、声をかけて話を聞くのが非常に良いと人から言われ、4 日目に親戚や知人の家を回る。
 - ・30 日からセンターの活動に関わり、最初に何をしたら良いか分からない、社協も指示出さず、これでいいのかと思いつながら電話番をする。
- 活動を振り返る
- ・全国からボランティアに来たいとの申し出に対し、ニーズが少ないため当初は断

ることが多いが、それでも単独で来る。

- ・スタッフのミーティングに参加しニーズがなかなか上がらないと話し合い、地元ボランティアで「声かけ隊」を始め、戸別に訪問してニーズを吸い上げた。
 - ・その後、グループ「325」(現在 5 人)を立ち上げ 38 番目のボランティア団体となる。現在も仮設住宅に訪問している。
- 活動の反省点
- ・社協でボランティア団体に災害ボランティアセンターの運営に参加してくれるように電話する。しかし、連絡を受け取る側は半強制的だと感じた。
 - ・自分又は地域で家が壊れているのに、被災地ではボランティアする側も被災者。

コーディネーターの役割が大きい

- ・テレビでは門前町(輪島市)の情報がどんどん出るため、ボランティアが必要以上に集まる。
- ・仕事がない、センターが対応できない。するとボランティアが勝手に動く。ボランティア同士のケンカや不心得者があった。門前町の校長の話では、ボランティアの腕章付けた人が夜の 10~11 時ごろウロウロしている。そこで、ボランティアを監視するボランティアをつけた。
- ・ボランティアセンターの指揮能力が整っていないといけない。

外部ボランティアとの関係

互助(扶助、共助)・外助の組み合わせ

- ・地元の人と外部の人が 3~4 名で「声かけ隊」をチーム編成する。
 - ・地元の顔見知りの存在が、被災者に安心・信頼感を与え、本音で話をしてくれる。
 - ・同行した外部の人は、客観的(冷静)に受け止め・観察できることから、地元の人が見逃すようなことにも気づける。
- ボランティア活動で大事なこと
- ・「やってあげる」と考えてしまうが、愛知県の足湯ボランティアのひと言「足湯をさせてください」から、ボランティア活動はしてあげるではなく、「寄り添う活動」であることに気づかされる。

・中越沖地震の刈羽村に行って、“一緒にがんばりませんか”と私たちが被災者に声

をかけたなら、大変良い笑顔をされた。

コメント 1 [防災科学技術研究所のHP](#)上の「J-SHIS」というシミュレーションより今後、30年以内に各地区で震度5弱以上の地震が発生する確率は次のとおり。

静岡県	浜松市役所	97.1%	宮城県	仙台駅周辺	80.6%
北海道	札幌駅周辺	19.0%	大阪府	難波駅周辺	92.8%
東京都	練馬区役所周辺	98.2%			
福岡県	博多駅周辺	31.5%			

== 「地域を超えた助け合い、そして一人一人に寄り添う」 ==
講師：栗田暢之さん（名古屋市 レスキューワーク代表理事）

平時 = 災害時の姿

穴水いかれたことありますか？

- ・能登半島と言えば輪島・和倉温泉のイメージで、穴水は通り過ぎる街。
- ・今回の地震において被害が大きくマスコミ報道、ボランティアが輪島市に集中したが、穴水の方は“私達も同じ被災者”であることに敏感であった。

のどか（穏やか）な被災地

“ボラやぐら漁”のように流れる時間がちがう、おだやかな海（内海）、まぶしい緑が豊富・素敵な地域財がある穴水に行って復興のためにお金を落としてほしい。平時の助け合いが、東海地震などの災害時の助け合いにつながる。

東海地震を考える

揺れるとは

- ・映像として残っているのが阪神淡路大震災だが、能登半島地震でも活断層型であり揺れる時間が短い。
- ・海溝から地盤が割れる東海地震は1～2分の時間揺れる。

浜松は広すぎる。揺れ攻め、水攻め、火攻め、土砂災害による孤立した集落。今までの災害の特徴が凝縮されたよう。皆さん大丈夫ですか？

この地域は、今後30年以内に地震が起きる可能性は80%以上。また、東海地震説から30年経っている。人によっては、60年間備えることになり待ちくたびれた雰囲気・感じが漂っている。



被災地から学んだこと

被災するとは

- ・ 本当に何ができるかわからない状態へ精神的に追い込まれる。
 - ・ 多くの人が震度6以上に揺れている瞬間は、「動けない」ことを今日学んだ。
- 災害ボランティアセンター
- ・ 行政の災害対策本部立ち上がると、社会福祉協議会が災害ボランティアセンターをつくる仕組みがスタンダードである。
 - ・ 仕組みができていても、的確・適切な活動ができるか、どうかが課題である。
- 民生・児童委員の動き
- ・ 能登半島地震では、何も言われなくても夕方くらいまでに、要援護者の安否を確認が委員によって行われた。
 - ・ その初動の情報からニーズをボランティア活動につなげることができる。

被災地の現状

- ・ 私たちは、家が壊れた人たちだけが避難

所に行き、被災者と勝手に考える。

- ・倒壊を免れても、すべての家の中はぐちゃぐちゃであり、そこにボランティアの活動場所やニーズが介在する。

本音が出てこない

- ・民生・児童委員、自治会役員などが自宅を訪問しても、“なんもなんも”(何も無い、大丈夫だよ)と言われる。
- ・日本は、もともと自分のことは自分でという民族、助けられ上手ではない。
- ・災害に出会うのは一生に一度くらい、そういう時だからこそ“助けて”といっても良いのではないか。



避難所では
・避難所の様子は、多少の改善が進んだ部分もあるが、基本的に阪神淡路大震災当時と変わっていない。

・日中残っているのは、高齢者と子供がほとんどで、若い人は家の片付け・仕事場に行っている。

助け合いを進めるのは

人の存在

- ・穴水では、平時から地域の核となる滝井さん、ボランティア協議会の会長(老人クラブの会長も兼務)さん達が動いた。
- ・私たちは自分が大丈夫だったらしっかり動かないといけない。また、言ったこと・聞いたことを活動に移せる人が必要。
- ・発災直後は、浜北(天竜)は浜北(天竜)で頑張るしかない。
- ・ボランティアは、マスコミ報道された被災地に集中するが、あまり心配しなくてもいい。時間が経てば必ずどこから来る。したがって、みなさん受け入れる準備できているか。

一人一人に寄り添う

- ・避難所では、ぎっしり人が居る状態。ひとりひとりの声を聞くことが大切。
- ・困っていることを誰に言うのか。行政の相談所・窓口とは異なった、同じ被災者・目線・ペースに合わせて「大変

だった」と聞いてくれる人の存在、そのような場や雰囲気づくりが必要。

- ・穴水ではそれが可能だった。それぞれの役割を尊重し組み合わせる
- ・血圧 200 超えた人の対応はボランティアでは無理。行政の役目 = 公助
- ・家の様子見たい・物をとりに行きたい、それくらいは地域の人、又はボランティアができる。逆に行政ではできない
- ・地元の人たちには言いたくない人もいる。
被災地外のボランティアを活用 = 外助

穴水では
訪問活動

- ・復旧期に、地元ボランティアがワークショップを開催し、被災者応援のために一生懸命、勇気付ける、穴水でできることなど考え各種の活動を計画し実践した。
- ・「うるうるパック」を持って被災者や家庭を訪問する活動を始める。
- ・訪問した先では、毎晩一人になると不安で泣きそうになるという人もいた。
- ・原則、毎日の声をかけ、丁寧に声を聞くことから被災者に安心感を与え、また見守り、変化を見逃さない活動につなげる。
足湯(画像：高野山足湯隊 HP 公開画像)



- ・下から被災者を見守るボランティアの姿勢がいい。(最低限同じ目線)
- ・お父さんには若い女性、お母さんには若い男性。足が暖まり、手を揉むことで、安心感・心が開放的になり、“実はすごく怖かった”、“今後はこうしたい”という本音や希望“つぶやき”声が聞かれた。

- ・地味であるが「被災者本位」「地元本位」の活動として、新しいニーズを掘り起こすことができた。
地元、子供達の活躍 = 育み
- ・被災ゴミ（ゴミにも思い出が存在する）の片付け、応援横断幕をつくる。
- ・地元の小学生が仮設住宅の表札つくる。

- ・「ほっと一息」つくだめの手作りのイベントで地元の小学生が歌う。大変盛り上がった。（泣かれた方、大笑いした方）
- ・ボランティア協議会で穴水の町民から集め仮設住宅の生活に必要な生活応援グッズ（つめきり、カレンダー、ティッシュなど）を配布する。

浜北会場 質問、意見

被災された地域で、助け合いの中“えこひいき”のようなものあったか？

滝井さん

なかった。ローラー作戦ですべてまわった。赤紙の住宅では、ボランティアが活動できないため。また、避難所、仮設入居の方が在宅避難者より手厚く行政が対応したため、同じ被災者なのと言う不満の声があった。

栗田さん

阪神淡路大震災のときに小学生だった人の話では、お父さんが地域で好きな人から助けた。つまりえこひいきがあった。皆さんは地域で嫌われていませんか？

地震後、ボランティアが大勢来たときにあわてないように、ボランティアセンターとして対策があるか？

栗田さん

ひとつは、腹をくくれるか。仕事がないときに、活用の仕方、現地を見てきてくださいとか、チラシを印刷してもらおうとか、前向きな発想が大切。

緊急物資は活用されているのか

滝井さん

確かに物が余ってしまった。品物によっては、他の災害被災地に持っていき使える。仮設にはうるうるパックがいったが、在宅の人には届かなかったという課題が残った。

自主防災会について、うまく機能していたか？

滝井さん

私自身はどうなっていたか把握していない。

栗田さん

- ・能登半島で地震の起こる確率どのくらいか、0.1%。市民の9割が何も対策をしていない。したがって、自主防災会の組織率3割も満たないと思う。
- ・それじゃいけないと気づかされたのが能登半島地震。
- ・愛知県は全国で2位になったが、防災活動に参加しているかのアンケート問いで、6割参加してない。いかに形骸化しているか。それがまず問題。
- ・一方で、自主防災の会長さんが、いろんな役割に分け組織を作っているが、本当に機能するのか？
- ・災害が起こる前にいかにして備えるかがポイントであり、ある自主防災会が2年間、家具転倒防止の対策を言い続けて、町内の8割で実施。こういうことが最近の防災の実情。



簡易トイレが必要になるが、現在準備している事業所はどれくらいあるか？

栗田さん

- ・例えば阪神大震災がデータで出てきた。

300 万人いて、30 万人が避難してきた。その地域の 1 割かなどで、行政が準備をしている。それがどこに届けられるかとか、だれが届けるのか決まっていない。

- ・私達も災害を想像し、ポータブルトイレを自分自身、簡易トイレなどを自治会で用意。また、隠れる間仕切りも一緒に。
- ・新潟中越地震の田麦山地区では、川にテントをはって自然に流した。また、一斗缶に足場を付けて簡易トイレをつくるとか、ちょっとだけ想像力を働かせば、いろんなことができると思う。

浜北ではボランティア連絡協議会が 25 グループである。滝井さんにアドバイスなどあったらお願いしたい。

滝井さん

- ・まとまった理由は、会長に人望があり。みんながついてきた。
- ・会議を定期的に関く。全部ではないが、

社協、区長、行政、など様々な人が会議に参加していただく。

- ・リードしていく姿勢と力を合わせていく。

毎年、町内会に要援護者名簿をつくるようにいわれる。どの範囲までをつかんでいるといいか。ポイントになることを聞きたい。
栗田さん

- ・阪神淡路大震災で亡くなった人の 45% 以上、去年の台風でも 60% 以上が 65 歳以上であることに留意すべき。また、日本全体の問題。
- ・最終的に行政は情報を出せない、すると地域のおせっかいしかない。対象を決めて、民生・児童委員が突破口として、要援護者と思われる人を訪ね、本人の了解を得て地図にプロットし、中高校生などと一緒にその人を運ぶ訓練に取り組む。
- ・誰もが安心して住みやすい地域福祉活動の一環として、気になる方には平時におせっかいしてください。

天竜会場 質問、意見



社協が災害ボランティアセンターを立上するという認識はないが。

浜松社協

- ・防災訓練などで PR していきたい。
- ・社協だけでは出来ない、災害ボランティアコーディネーター修了者と協力し合っていく。

穴水では体育協会も災害ボランティア活動に参加したが、報酬・援助はどうであったか。

滝井さん

穴水も無報酬。必要な資機材を集める場合もあったが、援助はない。

栗田さん

- ・災害ボランティア活動は、ここ十数年の歴史でまだ日が浅く、行く視点はあっても受ける視点や支援については行政・社協ともにこれからの状況。
- ・災害発生時は、市民による救出・救援が主である。その後、生き残るポイントは 3 日間の地域・地元対応。
- ・そこで平時の地域福祉、社協の役割は大きいですが、個人情報保護等によりその備えに不足を生じていることが多く、これからは市民の方の協力が必要となる。
- ・ボランティアは無報酬性であるが、センターの運営・活動に掛かる諸費用は必要である。
- ・赤い羽根募金などの災害資金を活用する方法がある。

ボランティアとして必要なことは？

栗田さん

- ・ボランティアの活動装備は自ら準備する

必要がある。

- ・私の場合、被災地近くに休息・休憩できる宿泊場所を探し、自分の活動・生活環境を自ら整えている。

滝井さん

- ・新潟中越沖では、富山県側の端っこに移

動して宿泊。

- ・現地では、宿泊場所を無料で提供した民宿などもあったので多く利用していた。
- ・能登半島地震では、ヒッチハイクで往復していた青年もいた。

== 栗田暢之、滝井元之さんからのメッセージ ==

栗田さん

- ・東海、東南海地震では、私、愛知県も浜松市とは運命共同体。お互いに負けずに、一緒に連携し備えていきたいと思う。
- ・過去の災害から学んで、生かしていく。
- ・他の地域とも交流してしっかりと備えていきたい。

滝井さん

- ・全く学習しないで私達は地震を経験した。皆さんは、他の地域から学習してから地震に対応できることになる。また、机上の論理だけでなく、実際の現場（復旧・復興後でも）に行き経験することが必要である。
- ・地震の起こった後、刻々と変化するので時系列ごとに必要な活動が必ず存在する。
- ・ボランティアへ理不尽な要求などがあるので、それに対応する力が必要である。
- ・仮設住宅から1世帯出て行くだけで全体の形・雰囲気のパランスが崩れてしまう。そのような時にボランティアの支援活動が必要となる。
- ・仮設で生活している人も、中越沖地震被災地に持って行き元気付けたタオルのワンピース作りに参加し頑張っている。
- ・さいごに、穴水町復興イベントの川柳大会入選した作品を紹介。
「忘れまい、いつも心に325、あの店この店そろろう町。」
「戦争と比べてみれば地震なぞ。」「震災でつぶれずに残った思いやり。」



== まとめ ==

まず災害について一人一人が意識をする。また、どのように備えていくか。行政からの働きかけ、市民からの活動も大切。そこから、市民、社協、行政が連携を。普段からの防災に視点をのいた市民活動。私たちそれぞれが考え“地域福祉活動”に結びつけていきたい。

追加 定例会会議録 第6回 災害ボランティアコーディネーター 浜北・天竜地区

日時：平成 19 年 10 月 19 日 19:30~21:30 会場：浜北区小林 高齢者ふれあい福祉センター

会議記録者：立石智三 会議録校正：野本

参加者：池野谷・鈴木勝彦・古井・三室・栗原・野本（浜北）大城（浜北区役所）

木下（天竜区役所）中村俊（浜松社協浜北）武田・立石（＃天竜）

意見交換：災害ボランティアセンター立ち上げ訓練、災害 VC 養成講座

準備、役割分担確認：災害ボランティアセミナー（11月10日、11日）

被災地から学ぶ：ゆめごよみ風だより

次回 日時：1月20日（日）10~15時、会場：天竜区山東 やまゆり荘（予定）

- ・センター立上げマニュアルづくり、ほのぼの灯りでご飯たき体験